

# 教育学と「教職教育学」をつなぐために

——『教育学をつかむ』を刊行して

木村元

四月にテキストブックス「学問をつかむ」シリーズの『教育学をつかむ』（木村元、小玉重夫、船橋一男著）を刊行した。

今日、戦後の教育や教育学のあり方が問い直されている状況がある。そこで生み出されている困難にも対応できるような教育学のテキストをどのようにつくるか、悩みながら議論して作り上げた。その点を振り返りながら、本書が目指したことなどを記してみたい。

教育学の世界では、教員養成や現職

研修のための「教職教育学」と、教員養成を目的としない「アカデミックな教育学」とが、分離されて捉えられ、教育学が今日の教育問題に十分に対応できない原因の一つとなっている。本書では、それを統一的にとらえることで、閉塞がいわれている教育学を見直そうと考えた。

## 教育の現状と教育学

教育についての報道は、話題にのぼらない日がないほど数多く、学力低下、学級崩壊、不登校、いじめによる

自殺など枚挙にいとまがない。教育がおかしいのではという危機感を多くの人が持っている。

それに対して、教育を研究対象としている教育学はこうした状況に有効に対処できていないのではないかという批判がある。その主要な原因の一つに、教育学が実際の学校現場などでの教育実践を主導できないとされていることがある。事実、アカデミックな教育学は、哲学や社会学の応用の学としてあり、実践に対して無力であり役に立たないと指摘されることが多くあ

る。

それに対して、教職教育学の方は、一人前の教師を育てることを使命としており、教師の日常の教育実践を支える教授方法・内容を中核にしている。このところの教育政策の動向は、こうした教職教育学をより充実させるために、現場教育経験者の積極的活用を進め、また教職大学院の設置を進めるなどして、教師の授業などのスキルの充実を目指している。

ただし、その場合、教職教育学はともすれば単なる教授方法の技術伝達のための学問として矮小化して捉えられがちである。さらに、最近の専門職性の議論は教師の世界にも及んでおり、これまで教職のなかでの、いわば内向きの専門性を述べることで果たされていた議論だけでは、広く社会に向けて説明することにはならないという困難を抱えている。

## 問われる戦後教育学

アカデミックな教育学は教育実践から遊離していると書いた。しかし、実は、戦後の教育学は、実践を強く意識して構築されてきたのである。

そもそも教育学は、近代学校の担い手である教員の養成と深く結び付けられて導入された。近代は、学校制度を整備し、組織的に人間形成を行うことを要請した初めての時代であり、教職教育学はこの学校制度に実質を与えるものとして位置づけられたのである。日本の教育学は、国家の強い統制のもとに学校制度を構想するという課題に応じる形で形成されていく。当初から社会を国家と見立てて、公定された内容をいかに伝えるかという枠組みを強く持たされていたのである。

戦後を迎えて、まずこうした国家主導が否定され、社会と教育との関係を

客観的に捉えようとして社会科学に基づく教育学を作り出そうとした。「教育とはこうである」という理念から教育を捉えるのではなく、社会のなかの諸関係、特に経済との関係で教育を捉えようとしたのである。しかしそこでは、教育が社会の中でどのような役割を果たしているかの説明はできたが、子どもを教え育てるという人々の日常の営みや教師の教育実践に十分に迫ることができたわけではない。

この反省にたつて、戦後教育学は、人々の子育ての行為や教師の教育実践のなかから固有な価値を拾い上げて、経済や政治など教育以外の価値から相対的に自律した教育の価値（教育的価値）を措定した。その背景には、高度成長など社会の大きな展開のなかで教育的な価値が経済の論理に従属させられてしまう状況があった。それに対抗するために、子どもの発達を軸にした

独自の教育的な価値を作り上げ、それに基づいた実践を積みあげながら教育学を構成してきたのである。その上で、教育学は、教職教育学が矮小化された技術の学にならないような視点を示してきた。

ところが、今日、こうした戦後の教育学がその存在を大きく問われている。

その批判の中心にあるものが、教育学は教育的価値を語る独自の世界に閉じこもって他の学問とは交流ができなくなっているとするものである。さらに、教育の状況のリアリティを捉えられず、教育実践の現場を主導しえなくなっているというものである。

### 本書で目指したこと

こうした把握にはむろんいくつもの留保が必要であるが、教えるという行為は教えるものと教えられるものとの

非対称的な関係を前提とし、ある価値を持って対象に働きかける行為であるから、どうしても規範的で価値的になりやすいということはある。また、学校で教えられるという経験をとおして誰しもが教育を当たり前のこととして受け入れているがゆえに、教育に関するこうした身近な経験にもとづいて気軽に一家言をもつことができ、あるいはそうした人々の素朴な経験を利用した政治的なデマゴギーとなりやすい。

このような教育の性格を自覚的に捉えるために、社会や歴史などとの関係を踏まえながら思考することや、実際の教育現場や経験を幅広い知見から捉える見方が改めて強く必要とされている。特に重要なのは、これらを踏まえて、子どもの中に現れてくる社会のあり方、教師の日常を成り立たせている教育実践の性格や教え伝えるということの意味を考えられるようになるとい

うことである。本書では、こうした点に考慮しながら、教育を成り立たせているコミュニケーションについての理解を中心におき、社会の新しい動向のなかで教育をどのように捉えるかについての知見を整理して納めた。

本書は、三二のユニットを三部一〇章で構成した。

その際に、一見自明とされる教育の奥にある独特のコミュニケーションの質を明らかにするために、教えるということを作り立たせているコアの部分をペダゴジーという概念で捉えた。ペダゴジーとは、教育の内側を構成する、教えることと学ぶことに関わるコミュニケーションである。教える方法と内容をついにしたものと捉えてもよい。本書では、これをもちいることで、自明とされた教育を少しでも深く考えられるように工夫した。

本書は、「ペダゴジー（教えるとい

うこと）」を真ん中に据えて（第2部）、それを社会や歴史との関係を踏まえながら（第1部）、さらに今日の教育が直面する現代的諸課題を介して（第3部）学ぶ構成になっている。

そのなかで、できるだけ、新しい現実に対応しようとしている教育学研究の知見を取り入れようとした。例えば、学級崩壊に見られるように学級が教える―学ぶの場を提供しきれない状況が生まれているなかで、改めて学級をどのように作り上げていくかという課題がある。そこには、日本の教師が用いてきた、教師と教え子の関係を強調して捉えるやりかたや子どもたち同士を仲良くするように働きかけることだけでは対応しきれない現実が存在する。社会の変化が教育を成り立たせる教師と生徒の関係を変えている現状において、それに即した対応が必要とされているのである。たとえば所収した

「シテイズンシップ」、「ジェンダーとセクシュアリティ」、「インクルーシブ教育」などのユニットはその対応をどのように考えるかの手助けになるように準備された。社会がグローバル化し、さまざまな文化経験をを持った人と一緒に過ごす機会が増え、また、男女の関係や障害を持つ人たちとの関係の見直しも大きく進む中で、教育をどのように捉えなければならないかが問われている。こうした新しい状況のなかでの教える―学ぶの関係についても本書では正面から捉えようとした。

### 対象とする読者

この本は、さまざまな読者層を対象にした。教師を目指そうとしている人や大学で教育学を学んでいる人だけでなく、進行している教育改革のあり方や現状の教育について広く考えようとしている人たちも直接の対象とした。

もちろん、このことが教職教育学とは別種のものであるということの意味するわけではない。むしろ、本書で示したような捉え方が今日の教職教育学にとって必要とされていると考えている。社会の問題として教育が問われているにもかかわらず、どうしても目先の対応に追われ、狭義の教職教育学の枠組みに陥りがちな傾向と、日常の教育の実践についてその意味を掘り下げる指向性が薄れている教育学の状況を両睨みにしながら克服することこそが、教職教育学の内実をより豊かにすることにもなると思うからである。

(きむら・はじめ)

＝ 一橋大学大学院社会学研究科教授

木村 元・小玉重夫・船橋一男 監  
『教育学をつかむ』有斐閣刊  
A5判、二九八頁、定価二〇五〇円(税込)  
●好評発売中